

## 特別企画 1

「地方からの挑戦」演題

## [特別企画1] 司会のことば

## 「地方からの挑戦」演題

稲葉頌一

日本赤十字社関東甲信越ブロック血液センター

本田豊彦

香川県赤十字血液センター

この企画は総会長である土肥博雄中・四国ブロックセンター長の肝いりで今大会から始まった、地方の若手によるさまざまな業務改善の取り組みを一括して発表させてみようという大変意欲的な企画であった。司会を任された我々は、推進・業務・製材・学術・採血など血液事業の全分野からの発表をどのようにまとめたらいいいのか途方に暮れてしまった。しかしながら、血液センターの若手職員たちの意欲はそのような年寄りの心配をあっさり拭い去ってくれた。地方の若いセンター職員たちが、自分のまかされた職務に対していかに積極的かつ真摯に取り組んでいるかを発表において知ることができた。

12演題という長丁場であったが、終わってみればあっという間であった。

前半の6演題の講評は本田、後半の6演題は稲葉が講評をまとめた。

**演題1 (SP1-1)**

若年層献血者確保の取り組み(第2報)～学生の街京都 新たな献血者の開拓「献血と学食のコラボ」～

京都センター 林 俊成氏(福知山出張所)

学食とコラボして、特別食まで準備された素晴らしい企画であった。今回の試みが初回とのことでしたので、学食の恒例行事になるように、ぜひ、継続して取り組んでいただきたい。また、参加大学等も増やして、若年層対策の主要行事となることが期待されます。

**演題2 (SP1-2)**

学校教育としての献血への取り組みと卒業後の献血状況について

神奈川センター 齋藤 哉氏(献血課)

40年以上継続して学校献血に協力していただいている高校の紹介。平成19年度の学年について、6年後の献血率が31.1%との報告であった。学校全体で取り組んだ素晴らしい成果です。6年後に献血できなかった約70%の方の分析や、200mL献血から400mL献血への移行率の算出など、若年層対策としてさらなる検討を期待します。

**演題3 (SP1-3)**

輸血学教育と献血推進を目的とした学術課の新しい業務について

兵庫センター 野口洋介氏(学術課)

医学部学生を対象に、献血と輸血の講義を行い、同時に献血も経験していただいたという発表であった。医療関係の学生とくに医学部学生に対する献血啓発は、取り上げられることが少ないですが、重要なことであり、継続して取り組むべき課題である。

**演題4 (SP1-4)**

北海道献血者における糖尿病関連検査グリコアルブミン異常率の5年間の推移

北海道ブロックセンター 西田菜穂子氏(検査二課)

グリコアルブミン異常高値の献血者の割合が、別途受診勧奨通知を郵送することで減少し、献血

者の健康管理に有効であったとの報告。献血時の検査結果に基づき、受診勧奨通知を実施するだけでなく、その効果を検証しているところが評価できる。

#### 演題5 (SP1-5)

医療機関との双方向コミュニケーションを目的とした説明会の実施

宮城センター 清水貴人氏(学術品質情報課)

新しい説明会の方式の紹介で、聞き手が説明会に参加して、講師からの質問に、○×で回答しながら説明を聞く方式が好評であったとの報告でした。輸血医療に興味をもってもらうのには、良い方法の一つである。

#### 演題6 (SP1-6)

地域血液センター固定施設の今後の在り方～近未来のモデルケース～

福井センター 清水慎一氏(献血推進課)

広域事業運営体制になってからの、地域センター固定施設の新たな役割を示した演題であった。午前中は血小板製剤採血、午後からは全血400mL採血を中心とし、血漿成分献血受付時間を短縮したといった内容であった。このような固定施設での対応は、多くの地域センターで必要になっている。私は、平成23年に、血液センター連盟の視察で、欧州3カ国を訪問したが、ドイツの固定施設では、朝6時半から成分献血を受け付けており(週2回)、出勤前に献血することが定着している。日本でも、献血種類による受付曜日・受付時間などの大幅な変更が必要になる可能性がある。若年層の献血推進と合わせて、今後も継続した検討が必要な課題である。

#### 演題7 (SP1-7)

自分たちの思いを、自分たちの手で一体験からの即復習で経験値を積む。広報スキルアップ作戦—静岡県センター 中野有華氏(献血推進課)

予算ゼロでの広報企画作戦の発表で、もっとクロスのラブインアクションで専門イベント会社のやり方を学習し、応用に成功した体験を披露してくれた。「家貧しくして孝子出ず」だなあと会場—

同聴衆を感心させてくれた。

#### 演題8 (SP1-8)

若手職員による事業効率化への取り組み—IT化推進プロジェクトで考案した4つの対策—

広島県センター 藤岡侑子氏(総務課)

まだ取り組み始めて間もないが、タブレットパソコンを導入し、事務文書の「ペーパーレス」化、「パソコン共有」による情報共有、「テレビ会議活用」による会議の効率化など、わずかの期間で目覚ましい成果を上げている。山本所長も若手職員を全面的に信頼して任せているとのことであった。

#### 演題9 (SP1-9)

九州ブロック管内血液センター表彰制度「グッドジョブ賞」について

九州ブロックセンター 青柳里美氏(総務課)

職員の意欲向上のために表彰制度を導入したが、さまざまに戸惑いがあり、普及浸透には時間がかかるという反省を込めた発表であった。我が国のように、平等が優先される社会では、表彰されても実利がないこと、勤務評定に重なってしまう恐れのあることが、制度普及の障害になっている。職員のやる気を期待した表彰制度はとくに上からの推薦ではなく、同僚からの高い評価こそがやる気を起こさせるという指摘は鋭いものであった。今後この制度をどのように発展させられるか、次に期待を持たせる発表であった。

#### 演題10 (SP1-10)

中四国ブロック血液センター経理・用度業務効率化検討会による業務内容改善に向けての取り組み  
中四国ブロックセンター 藤田一輝氏(総務課)

ブロック化した経理と用度が縦割りを排して問題点を整理し、経費削減への取り組みを行い、大きな効果を上げ始めているという発表で、本来、事務部長のトップダウンで行われる事業効率化を現場職員に積極的に取り組ませているところは上司の手腕というべきかもしれない。今後は経理・用度という狭い範囲の横断だけでなく、すべての課にまたがる意志疎通を図ることの重要性を示唆

する発表であった。

#### 演題11(SP1-11)

東海北陸ブロック血液センター製造部門における  
QC活動への取り組み

東海北陸ブロックセンター 大塚祥世氏(製剤課)

製造部門のインシデント事例に焦点を絞り、その対策を教育訓練という通常の手法でなく、職員同士での相談により解決策を模索し、対応しようというQC活動であった。本場名古屋であるだけにQC活動の教育を受講する機会が多く、発表者もこの活動に参加して知識を得ているとの報告であった。インシデントレポートの有効活用として理想的な対応と言えよう。

#### 演題12(SP1-12)

看護師確保対策の検討—ナース業務謎解きDVD

作成を試みて—

熊本県センター 舩田里枝氏(採血課)

就職希望看護師募集に採血看護師の細かい業務を示し、入職後業務の落差を感じて退職するものを作らないように配慮したDVDを作成し、入職希望者にはじめから細かい作業を紹介して、不満を取り除いておこうという試みで、看護師の確保に苦労している地域の現状の報告であった。

これらの演題はいずれも取り組み始めて日が浅く、成果を上げているものや、まだ上げていないものなど結果はさまざまであったが、いずれもよく練られたアイデアが出されており、来年にはかなりの成果が期待できる発表ばかりであった。この企画は次期会長の河近畿ブロック所長も是非引き継ぎたいとのことであり、今後の本学会の目玉になることが期待される。